
並中同窓会来る！

明

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

並中同窓会来る！

【Zコード】

Z0151BA

【作者名】

明

【あらすじ】

綱吉がボンゴレを継ぎ、10年後イタリアで同窓会をします。
カップリングは無しの方向で行きますのでよろしくお願ひします。

届いた手紙

部屋には一人の男がいた。その男は目の前に大量の封筒を並べ、

一枚手に取りながら差し出し主にサヨックしている

その時、同じ事を繰り返す流れ作業の中淡々と進んでいた男の手が不意に止まつた。

それは日本から一通の手紙。

「これは……」

- - - - -

二二

「アーティスト」

失礼します

執務室に入ってきたのは既に名実ともにボスの右腕となつた獄寺隼人である。

「どうしたの？」
隼人

「はい、十代目宛てに日本のお母様からお手紙が……」

「由さんかい？」

綱吉は書類から目を上げ、手紙を受け取り、手紙に目を通す。

「…………へえ」

手紙を読んでこむ綱吉の田まふり、と顔を擦かしむよつな田になつた。

「何と書いてあるんです?」

「並中で同窓会やるやうじこよ」

「同窓会、ですか」

「うん」

「で、どうするおつもつですか?」

「そーだなあ~」

綱吉は顎に手を当てて手紙を見ながら考え込む。

「じつしょう…。この日は大事な会議がじつしかであつたよね?」

「はー。では欠席どころ」とこ「いじやねえか

「リボーンわん!」

突然聞こえたリボーンの声に獄寺は慌てた。しかし綱吉は全く動搖していない。

「驚かねえんだな、ツナ」

「勿論。お前、隼人が入ってきた時からずっとあそこに居ただろう?

?」

と言つて、部屋の扉を指差した。

「フンつ。いろんな分かつて当然だぞ。だが、前よりは成長したじやねえか

「当たり前だ。おまえと何年一緒にいると思つてんだよ

リボーンと綱吉は互いの顔を見合させて「ヤリと笑った。
ちなみに獄寺は、リボーンのせつきの言葉（前半）を聞いて頃垂れていた。

「まあいい。で、同窓会の事が中学のときの奴らにお前の今の姿を見て驚かせるのも悪くねえ。ってことで参加しろ」

「まあ、別に俺はそれでもいいんだけどこの日イタリアで会議入ってるからいけないよ？」

「こつちに呼んじまえばいいじゃねーか」

「ああ、なるほど。」

綱吉はポンッと手を叩いた。

「さつすがリボーン、悪知恵が働くね。じゃあ隼人、ジェット機の準備よろしく。多分一機で足りると思つかう。」

と、綱吉は可愛く笑つた。

「本気ですか十代目！？　！」は世界屈指の大マフィア、ボンゴレの本部なんですよ！？

「え、ダメ？」

綱吉は小首を傾げて獄寺に問つ。

「隼人はここでやるの反対……？」

「やつ、そ、そんなことは……」

「隼人だったら分かつてくれると思ったのに……」

そして俯いて涙目になる。^{うつむ}

「（ま、まずい！ 十代目が泣かれてしまうー）わ、分かりました。
至急準備を始めます」

「本当！？」

ぱあっと笑顔を咲かせて綱吉は笑った。

「やっぱり俺のこと一番分かってくれてるのは右腕の隼人だよね！」

右腕の隼人だよね
隼人だよね
（脳内
エコー）

「はいっ、お任せください十代目！」
「うん、よろしくね。信じてるよ隼人」
「はいいいいいいいいいいいいいいいい
……………

獄寺は執務室から走り去つて行つた。

（ちょろいな）
「お前…黒くなつたな…」
「え、そうかな？ ふふふつ」

その時の綱吉の顔が黒い笑みを浮かべているのを見て、リボーン
は昔はあんなに素直だったのにどこで育て方を間違えたのか…と重
い溜め息を吐いた。

最近迷惑電話が増えたこともあって（花に全く覚えはない）

「もしもし」

休みで良かった、と溜め息を吐く。
すると、また携帯が鳴る。さつきと同じ番号だった。

「うわ……やつちやつた……」

a · m · 8 · 1 · 3

携帯を元の場所に置き、時計を見る。

「知らない番号……（まあこいつか。急ぎだつたらまた掛け直していく
でしょ）」

溜め息を吐きながら起き上がり、着信履歴を開く。するとそこには最新の番号と同じ物がいくつか並んでいた。

黒川花はその日の朝、携帯の着信音で目が覚めた。
まだ眠いのかベッドの中から目を擦りながら携帯を手に取る。しかし、手に取ったとたん着信は切れてしまった。

「もつなんに……？」

少し警戒しながら通話ボタンを押した。

が、返ってきたのは拍子抜けするほど明るい声だった。

あつ出た。もしもしー？　久しぶりだなー！

「…………？」

あ、分かんねえ？　俺だよ俺

「オレオレ詐欺……？」

や、違うつて！　俺だよ。山本。山本武

相手は苦笑しながら名乗つた。

「あら、久しぶりじゃない山本」

だなー10年ぶりくらいか？

「それにしてもあんたがあたしに電話してくるなんて珍しいわね。
っていうか私あんたに番号教えたかしら……」

考えてみてもかなりの秘密主義だった花は教えたのは信用出来る
女子で、男には…たしか委員長のみだったはず。

いや、聞いてねえけど元同じクラスだった奴に聞いたらあつさり
教えてくれたぜ？

…そうだった、思い出した。その信用出来る女子のほとんどが山本
武親衛隊かファンクラブに入つてたんだったわ。ああ、頭が痛くな
つてきた。

「…………そつ。で、何の用？」

あのひ、同窓会のことなんだけど黒川幹事だったよな？

「ええ。そういうあんたたち3人今どこにいるの？　同窓会の葉
書、あんたたちの分戻つて来たから一応沢田のどこに纏めて送つと

いたんだけど…」

今? んー、いろいろなとこ回ってるからもう少しあのまねえかな。ま、いいじゃねえか。んで用件なんだけど、

山本はハハッ、と軽く笑つて誤魔化す。

俺りその口用事あるからいけないんだよな。だから逆にお前、りこ来てもらえないかと思つてわ

んん……?

「どうこう意味かしら?」

単刀直入に言つと同窓会の会場を変えたいんだよな

はい?

「いまさら何言つてるのよー もう予約しちゃつてるし、今やいがい
こも押さえられるわけないじゃなー!」

予約取つたのって並盛のホテル・マロスの広間だったよな?

「ええそつよ」

じゃ大丈夫だつて。俺らがやつとくからね

「やつとく?」

そう。会場のキャンセルと新しいとの準備と用意、あと来る奴
に知らせるのもな。つてゆうか会場はもう決まつてるんだけどな
「え、どう?」

あまりにも軽く言われたものだから隣の県とかじり、ヒ花は考えていた。が、

イタリア

は…………？？？

たつぶり30秒は固まつたと思ひ。

お~い聞こえてるかー黒川あー?

「え…ちょ、待つてよ…」

なに?何か不都合でもあるか?

「いやいや、ありまへりでしょー」

「え~、ど~?」

山本は本当に分からないとこつた風に言ひ。

「いや、イタリアまでの費用とかパスポートとかビザとか…あーそこらへんは気にすんなつて

「いや、無理よ!~」

ハハシ、まあまあ落ち着けって。もつともうすぐ来るからや

「え? なんのこ 」

ピーンポーン

「ほり、来たぜ。とりあえず行つててみな?

山本は笑う。そしてよく分からないまま花は玄関に行き、ドアを

開
け
た。

届いた手紙（後書き）

この話は他のサイトでやっていたものを持つてきました
あ、自分のサイトなんぞ盗作とかじゃないですよ（ -_- ）

近々そつとを閉鎖してこのままで移転しようかと、もぐらみながら
も迷い中……

ピーンポーン　ピーンポーン

「はーー」

ガチャ

「どうり様…」

そこには上から下まで真っ黒な青年がいた。髪も目ももちろん黒。黒いピシッとしたスーツを着て、白いワイシャツに黒いネクタイを締めた、とても良い笑顔で「ゴーゴー」と笑う若い青年だ。

「いらっしゃり、黒川様のお宅でしょつか

「は、はー」

尋ねながら青年は嘘臭く「ゴー」と笑つて問ひ。

「では、花様は御在宅でしようか」

「私ですけど…（ちょっと… あたし『花様』なんて呼ばれる覚え全くないんですけど…?）

「そうですか」

「（いやいや、そっちが聞いたんでしょう…?）

「あの、私に何の用でしょうか?」

「私はこれのある方からあなたにお渡しするよう仰せつかつた者です」

「はー」と青年はまた笑つた。その時の青年の顔は「面倒くさい面

倒ぐたい面倒くせこ」と連呼してくるよひ見えた。

青年はスッと一通の封筒を差し出す。

「手紙…？」

裏を見てもそこには差出入の名は無く、紅い封蠅がありなにか紋章のようなものが押してあった。

「では、私はこれで」

「えつ…？ あのっ、ちょっ…！」

……バタン

花の制止を聞かず出て行ってしまった。

(弓毛留めてんだから、ちよつとは上まれつつのあの男…)

おーい、黒川ー？

ビクッ

出て言つたドアを見ながら心の中で悪態を呪いつてると携帯からいきなり声が聞こえて驚く。その声は通話を切つていなかつた携帯から聞こえてきた。

「あ、ごめん山本」

「ま、別にいいぜ。そつそつ来ただろ? 手紙

「あんたが行つてた来るつてこれのことだつたのね」

「ああ、まあな

「で? これつて?」

さつきの件

「ああ、同窓会のやつね」

言いながら花は封筒を開けた。

同窓会のお知らせ

「無沙汰いたしております。いかがお過ぎでしょうか。
さて先日も通知した通り、このたび並盛中学校の同窓会を行います。

大変申し訳ありませんが日程を変更致することになりましたので
今一度検討して頂き、恐縮ですが八月一三日までに同封の葉書にて
再度出席のお返事を頂けると幸いです。
詳しい日時、場所は下記の通りです。それではよろしくお願ひ致
します。

記

開催日 平成××年八月一七日

時間 午前八時半

集合場所 並盛中学校 校庭

参加費用 突然の変更のため、此方で全て負担させて頂きます。

備考 服を用意していない方は私服で結構です。持ち物は特に必要
ありません。

八月九日

幹事代理 沢田綱吉

「……なにこれ」

え？何のことだ？ツナを勝手に幹事代理したこと怒つてんのか？別にいねえと思ったから勝手にしちまつたんだけど…

「いや、別にいないから大丈夫だし悪くはないけど……じゃなくて！」

「じゃなくて？」

「なんでもうこんな準備してんのよーーー！」

花が電話口ぬ向かつてらしくない大声を上げる。

それは『Un capitano! ? ora . (隊長！時間です)』つと、Io lo capii . (分かつた) 悪い黒川、時間だ。またな

「え、山本っ！？」

ブツ、ツーツーツーツー……

切れだし……

それから、何度も山本の（だと思われる）番号へリダイヤルしても一度も繋がらなかった。

電話と使者（後書き）

区切り良いことなので、とか思つてやつたら、話題と2話題の差がハンパなくなつた。 (... - - -)

ちなみに「」が（話の）現場で日本語で、『』は現場でイタリア語。が電話の日本語で、『』が電話のイタリア語です。

見にくかつたらすみません。

久しぶりの再会

とこりわけであつて、この間に同窓会当口。

山本はあの日の電話で全てこじちでやると言つていたが一応私が幹事なんだから、と一昨日やつとつながつた電話で言つたところ、またあの青年が名簿を届けてくれた。その時に「こんな仕事増やしてんじゃねーよ」みたいな声が聞こえたのは無視しておこりや。

名簿を見ると、前回の参加人数より『参加』の人気が驚くほど増えていた。その理由はほとんどのクラスメイトがボンゴレの経営する企業の系列の会社で働いていたためできた、所謂『大人の事情』があつたからであることは誰も知らない。

花は私服のまま、時間より少し早いくらいに懐かしき並中の校庭に着いた。そこにはもう沢山の人があり、たがいに再会を喜び合っていた。周囲を軽く見回してみるも、中学時代に良くも悪くも目立つた三人組はまだ来ていないようだ。

「あ、花ーー！」
「京子、久しぶり！」

中学時代より、より大人びた顔つきになつた親友が手を振つて駆け寄つてくる。卒業してからめつきり会う機会も少なくなつた親友にも会え、花もまた、再会を喜んだ。

それから約三十分後……

一応出席を取ると、一人が家の用事で急に来られなくなつたものの、あのはあの三人以外全員來ていた。しかし、もう集合時間はどうに過ぎていてもかかわらず、あの三人組は現れる気配もない。女子たちはまだ来ないあの「大アイドル（？）」をまだかまだかと待ちわびていた。

いまさらだが山本は電話で場所をイタリアと言つたが、なぜ場所がここなのだろう。もし本当にイタリアでやるとしても、場所は空港のほうが都合がいいし、それに私たちは誰一人パスポートを持ってきていません。

そんなことを考えているとまた女子たちから何度目かも分からぬ質問が投げかけられた。

「ねえ花ー、獄寺くんつて来るんだよねー？」

「山本くんも来ないよね？」

「ねえ獄寺君はー？」

「一応出席になつてたから、もつちよつとしたら来るんじゃない？」

それにつんざりした顔で返して、不意に空を見上げると遠くから何かが来た。目を凝らして見るとそれはすごいスピードでこちらに向かつており、それは校庭の上空にピタリと止まつた。

花は啞然とした。周囲も「は？」とか「え！？」とかいう顔をしている。

それからその真下について意識を取り戻した一人が校庭の脇のほうにすゞつと後ずさつて行く。それに続いて意識を取り戻したやつら

がほとんど一斉に波が引くように脇へ寄つた。するとそれはそのままのを待つていたかのように地面へそれを着陸した。

着陸して間もなく、中から人が出てきた。

「よお、皆一。元気だつたか?」

うるせーぞ野球バカ。ちーとは静かにしゃがれ

その人物は山本と獄寺。二人とも昔よりものすごく格好良くなっていた。

山本は昔より爽やかさが薄れ顔つきが精悍になつてあり、獄寺は相変わらずアクセサリー類が多いが不良っぽさが消え、男でありながら独特の色気を漂わせていた。

「これによつて男女關係なく一人の信者かわいに増えた」と話を聞いておく。

『え、どうして！？』

その他大勢が口を揃えて言う。

「まあそれは道々教えてやるからさ、な！」

突然の状況の変化に戸惑いながらもクラスメイト達はジエット機に乗り込んだ。

一方、花はといふと、

(つていうかこれ、借りるのこへらかかるのかじり…)

と現実的な事を考えていた。

「おお～！」

「結構広～い！もつと狭いかと思つてたー」

「へえ～キレイじゃん」

山本と獄寺がクラスメイト達をジェット機の中に入れると、次々とそんな声が漏れた。

獄寺が先頭に立つて細い通路を進む。クラスメイト達は手頃な椅子に座りうつとするがそこで制止がかかった。

「おい、何してんだ？」

制止をかけたのは先頭を歩いていた獄寺だった。

「いや、だつてどこに座つてもいいんだろ？座つちゃダメなのかな？」

座りうとした男はちよつと不満そうに言つた。

「いや、別にこひちでいいなら座つてもいいんだが

ま、いいかといふように向きを変え、スタスターと奥のほうへ歩くと、自動ドアが開いた。

不満そうにした男は獄寺の言葉を不思議そうに聞きながらも、元の

椅子に戻る。

ただの椅子のように見えたが見た目に反してものすゞくふかふかしてそれでいて座りやすい、とても良い椅子だった。満足感をおぼえ、椅子にふんぞり返るように座り、ほかの奴らを呼ぼうと口を開く。

しかし、その時通路の奥のほうからワアッと音の声が聞こえる。

その声に驚き、後ろを見てみるとそこにはさつき獄寺が入ろうとした自動ドアがあり、皆がその奥をキラキラしたような目で見ていた。そんなに驚くものがあるのか、どうせトイレの大きさに驚いた、とかだらう、と見当をつけて覗いてみる。

さつきの考えは木つ端微塵に碎け散った。

そこは大きな部屋だった。上には小さなシャンデリアのようなものが。下一面には細やかで、繊細な模様が広がる赤絨毯が。正面には大きな丸い円を描いた机と綺麗に飾り付けられた椅子が。他にも、いかにも柔らかそうなソファーが数個と一般的なモノより少し大きく、これもまた豪華に彫刻で刻まれた模様の入っている机がソファーと同じ数あった。

獄寺は感動した様子のクラスメイトたちを置き去りにしてソファーに腰を下ろし、一人優雅に紅茶を入れていた。

入り口に固まって入ってくる様子のないクラスメイトたちに獄寺は気づいた。

「そんなところで何やつてんだ。早く入れ」

「そうそう。これからすぐ出るらしいからね」

後ろから声がしたと思い振り向いたら、そこには一番最後に乗った山本がいた。

「全員乗ったか」

「おひ じゃ、離陸すっから座れー」

皆は意外と素直に従つて、どんどん手短なじつに座つていき、ジエット機は無事に並盛町を離陸した。

久しぶりの再会（後書き）

最近、獄寺さんはともかく山本さんはなんであんなに身長がでかいんだろう…と考えます。

あの人は生糀の100%日本人のはず…。黒髪だし黒目だし！でも
なんで身長あんなでかいの…！？みたいな 笑

私自身女とつても身長が150センチという低さなのでものすご
く…ね……ハハハ（目を逸らしながら&乾いた笑い）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます！

時は遡り、こぢらイタリアのボンゴレ本部。

こぢらでは綱吉たちの部下の手によつて着々とパーティの準備が行われていた。

普通マフィアの本部で一般人のパーティなど、と不満に思つものも多いだろうが不思議な事に準備をしている部下たちの顔は嫌がるどこか満面の笑みを浮かべている者も少なくなかつた。この理由は約1週間ほど前のことである。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「おい、聞いたか？あの話。ありえないよなー、ボンゴレの本部で一般人がパーティーするなんて」「ああ。いくらボスの御友人だからって…なあ？」「だよなー」

今よく流れている噂を聞き、ぼやいているのは雲部隊の新人隊員、ティールとウォムである。

「おーい、お前らー！」
「あれ、柳さんどうしたんですか？」
「あの噂、おまえらも知つてんだるー。つちの修練場でアレの話があるらしいぞ」

言つたのは二人の上司の柳で、彼は言いながら親指でクイッと後ろを指した。

「あれに説明つて必要いらなくないですか？俺もうなに聞いても言
い訳にしか聞こえないかも…」

「まあ、せっかく説明してくれるって言つてんだから聞いてみようぢやねえか

柳は笑つて、一人言いたいことを言つたらすぐに行つてしまつた。
上司から言われたのだから行かないわけにもいかない。二人は仕方
ない、と溜め息を吐きながら修練場へと向かつた。

カラカラカラ

失礼します

修練場に一礼してから中へ入る。

顔を上げたそこには人人人、と、一面の人だかりがあつた。ここにはやはり雲だけでなく、ほかの部隊の人間も大勢いるようだ。

新人の一人は改めてボンゴレの人の多さに驚いていると、ざわめきが前のほうからすーっと退いていき、人の視線が前に集まつた。

周りの視線に促されるように一人も前を見ると、そこには自分たちのバスとその守護者がいた。

バスの沢田綱吉隊長は一見気の弱そうな穏健派の置物バスというのもつぱらの噂だ。だが先輩（柳さん）に言わせれば、ひとたび戦場に出ると最前線で空を舞うようにすべての敵を倒していくらしい（というかそれに見惚れてたら、もう既に戦闘が終わっていたらしい）。

まあ自分で見たこともないし、先輩（柳さん）はバスの信者だから幻でも見たのかもしれないが。

……でも、あのさいきょう（最恐・最凶・最強・最狂）な雲の守護者、雲雀恭弥隊長の上司なのだから強くないわけない……と、思う……いや、もしかしたら見た目に反してあの隊長よりヤバい戦闘狂とか……。

…………とにかく！ ただの傍若無人であるようなバスでないことを願うのみだ。

「ここんちわ、皆」

マイクも使わずに言つたその言葉は、部屋全体に響いた。

「皆も知つてると思つけど、来週にこりで俺の同級生を招待してパーティすることにしたんだ」

ザワリ

「そのための準備を君たちに頼みたいんだ」

ボンゴレでパー・ティーをやること自体ありえないのに準備を自分の部下たちにやらせるなんて…ボスは何を考えているのだろうか…。修練場は噂が真実だつた事に対し、ざわめきと共に唖然としたような微妙な空気が漂つていた。

「お言葉ですが、ボス！」

あれは大空部隊の中の一つの班長を務める……さんだ。誰も普通ほかの部隊の人の名前まで覚えていない（ハズ）。

「なに？ フィリオ」

「何故ボンゴレでパー・ティーを催す必要があるのですか。一般人がここへ来るなど…危険すぎます！」

最も過ぎる意見だ。わざわざこんなところに一般人を連れてきてパーティーをするなんて。それにもし万が一にでも敵に襲撃されたら命の危険が伴う。

「大丈夫。当日は俺たちが付きつ切りで警護するから」「隊長方が直々に…！？」

ザワリと再び空気が揺れた。

「そうなさるとしても、ボスの御友人らがいらっしゃるという事を知ったファミリーがここに到着するまでに襲撃してきた場合は

」

「迎えと送りには隼人と武をつけろ。不満？」

「いいえ。しかし、いかに隊長らでも田の舎かないところもあるはず。そんなところであつた場合はどうなさるのですか」

彼とて好きで自分が敬愛するボスにこんな事を言いたいわけではなかった。しかし、もしも本当に襲撃され誰かが怪我を負つたり…死んでしまった場合、一番悲しむのはボス自身という事も知っていた。それほどに優しいボスだからこそ、フィリオは彼に付いていつているのだ。そんなボスに悲しい思いをさせたくない、彼はそれだけを思っていた。

「まあ、尤もだよ。そつなんだけどさ……」

ボスは懐かしそうに眼をそつと細める。

「その日俺はこっちでやることがあつて出られないんだ。いつも通知が来る度にそうだから、俺たちはまだ一度も出た事無いんだよね。まあ、毎度のことだし今回もまた無理かなーって思つたんだよ。そしたら、」

とても嬉しそうに

「じゃあ俺たちがそつちに行つてやるよ、って言つてくれたんだ。だから…せめて彼らをがつかりさせたくない……そして、俺の居るこの自慢の場所で盛大に彼らを迎える…、そう、思つたんだ」

ボスの友を想う気持ちに心を打たれたフィリオは目を潤ませて言った。

「私たち部下一同、ボスの御友人らの為に精一杯やらせていただきます！」

口には出していないものの、他の皆の顔もさつきまでとは違つてい

た。

「あつがとつ」

その様子を見て、嬉しそうにボスは微笑んで言つた。

「まあ、嘘なんだけどね」

。 。 。

。 。 。

。 。 。

『えええつーーー?』

「いのんじめん。つい、ね?ちょっと悪戯心が……」

あまり悪びれなく子供のように舌を出しているボス。それを風と霧の女性は苦笑し、雨はいつも通り楽しそうに笑つて見ていた。

「でもこいつに来てくれるのは本當だよ?で、お詫びと言つてはなんだけど同じ日、もう一つパーティーをやります!」

まだ何か…?といつ若干の恨みが籠つた目線を遠慮なくビシバシと叩きつけてくる部下たちに苦笑しながらボスは言つた。

「それは君たちへのお礼のパーティーだよ

俺たちは揃つて首を傾げた。

「今年は俺がボンゴレ十代目になつて10年目なんだよね。だからここまで付いてきてくれた君たちにお礼がしたいんだ」

ボスはありがと、と黙つて俺たちに頭を下げる。

「だから、今回の事はこれでチャラ、つてことはならないかな？」

だめ?とでも言つよつてボスはフオリオに向ける。

「…分かりました。いいでしょ?、やらせていただきます」

フイリオは、なあ?とでも言つよつて周りの隊員へ目を向けると、それを受けた隊員は揃つてしまふがないなあとつよつて笑つて肩をすくめた。

ボスはそれを見て満足そうに笑つていた。

尊とい壁（後書き）

付け足し。

このお礼パーティーは同窓会と同時進行でやるから、俺たちの事は気にしないでみんなで楽しんでね、と言つ意味です。

わっかりにく~い。あははは、は…（泣）

文才…ほしいなあ…

お気に入り登録してくれている方が増えていてびっくりしました。
感謝です！！
意見などありましたら感想にてよろしくお願ひします！

行き先はイタリアです

時は戻つてジエラット機内。

そこには窓に寄つて外を見る元クラスメイトの男子たちの姿。すっかりどこに行くのかと思ったことなど記憶の彼方へ捨て、窓から見える外の景色を見て楽しんで（？）いる。

「みんなすっげえ楽しそうなのな」

「ま、普通に過ごしてれば空を飛ぶ機会なんてほとんどないしな」「ははっ、確かに！　俺たちが特殊すぎるんだよな～」

「特に十代目とお前は日常的に飛んでるしな」

「あ、そっか。でもそういうえば最近はあんまりそうゆう任務ねえな」「俺たちは任務を渡す側の人間になっちゃったからな。それに俺たちが出る任務がそういうあつてたまるかよ」

つていうかそんなんあつたら今頃世界終わってるかもしんねえ……
とかよつと思う獄寺。

「まあな～。でもホント最近体動かしてねえしな～。獄寺、あつち付いたらちよつと付き合えよ」

「いいぜ。俺も最近勘が鈍つちまつたしな。付き合つてやる」

付き合つてやると言つたものの、あの日、回収会の手紙が来たあの時リボーンから受けた言葉いまだに引きずつていた獄寺はまたそのことを思つ出し、ちよつとくこんでいた。

「なあなあ山本」

そこに元気まで騒いでいた男どもが声をかけてくる。

「ん、なんだ？」

ず～んとした空氣を出す獄寺をこなはツナか小僧が何か言つたな、と何気に鋭くなつた山本は苦笑いをするが、声をかけられさつきと一変笑顔を向ける。

「お前わつとき行き先は道々、とか言つてたよな？ で、結局どこ行くんだよ」

男たちが話しかけてきた時点でジェット機内が妙に静まり返つており、みんな耳を澄ませていることが分かる。

「ああ、わりいわりい。言つてなかつたな。今から行くのはイタリアだぜ」

「んん？ 悪い、聞き取れなかつた。もつかい言つてくれんね？」
「イタリア。」

「も、もつか
「イタリア。」

一回田は即答、三回田は質問すら遮つて言われてしまった。
三度同じことを言われて、それを間違いなくここにいる全員が聞いてしまつたら、もはや疑つ余地なんて米粒ほどにもない。

そして、機内にいる全員、先生すらもが叫んだ。

『イタリア～～！！！？？』

叫んだ後も口を大きく開け、あんぐりとしている元クラスメイト&先生を見て、その反応が分かつていたかのように顔で「あ～やつぱり」と物語りながら、指で耳栓をする獄寺。「みんなリアクションすっげ～」などと書いて爆弾発言をかました張本人こと山本は笑つて、しかもちやっかりこちらも耳栓していた。

例外として最初から行き先を知っていた花と「へえ～、楽しみ～！」とどこかズレている天然な発言をしている京子もいたが。

「え、これイタリア向かつてんの！？」
「あたし海外に行くお金なんてないよ～？」
「イタリアでだと？ 同窓会なんてどこでやるんだ！」
「私今パスポート持つてないよ～？」
「俺もだ～！」
「つてゆうかビザなくて入れんのかよ～」
「イタリア楽しみ～！」
「京子……」
「俺何も持ってきてねえぞ～？ デリすんだよ～」

「そりいえば私、一日しか休みもらつてないんだけど……」「俺も！たしかイタリアつて片道十時間とかかかるじゃん……！」

「ああー！明日部長に怒られる……！」

そんな口々に喚く（？）みんなを見て山本は言い放った。

「え、なんか不都合ある？」

みんなの双眸が一瞬にしてギロツと山本を向く。そしてまた同じような事を一気に言われた。

「ふうん。そんなことか」

普通なら一気に聞き取れないような大人數の言葉を全て理解したような言葉だった。

それから山本は一気にしゃべりだす。

「まずイタリアまでの金の心配は必要ない。案内にもあつた通り、金は全てこっちで負担する。パスポートとビザはいらない。これら入るところは俺たち専用の出入り口だから。もちろんイタリア政府にも許可是取つてある。それなりの信頼もあるから融通も利く。このジェット機は片道三時間で着くから日帰りでも心配ない。泊つて行きたいやつは俺たちに言えば一泊くらいだつたら泊るとこじろを提供してやる。一日しか休みとつてないけど、もうちょっとといつてやつも言ってくれればお前らの会社のほうに届けといてやるよ」

クラスメイトたちはポカンとした。一方の山本は笑顔で「で、他は？　もうない？」と言つていた。

「おこ、一個忘れてるやで」

「え、嘘。なに?」

「場所」

「ああ！ 忘れてたぜ」

「しつかりしろ。それでも幹部かテメエは」

「あははっ、ワリツ」

さつきまで全く口を挟まずにいた獄寺が、大量の横文字が書いた書類のような束を机に置いて言った。いつの間にか眼鏡をかけている。

「んで、場所なんすけど、会場は俺たちの仕事場なんで心配いらな
いっスよ？ 先生」

「仕事場？ つてゆうか『幹部』ですと？」

「やついえばお前ら、同じトコで働いてんだろう？ どこで働いてん
の？」

1人の男が聞くと、みんな気になっていたのか口々に同じような事を聞いてきた。すると山本は困ったように笑って、助けを求めるように戯寺を見る。再び書類に目を落としていた戯寺はその視線に気が付き、ふり、と息を吐いて眼鏡を外した。

「悪いな。それは十代田の許可がなければ言えない
『十代田？』

はて、どじがでよく聞いていた言葉のようないい？」

「俺らのボスだぜ」

『…………はあ……』

ボスと言われる人なのだからきっと偉い人なのだろう。たぶん社長の事だと思うがなんで『ボス』？

そんな事を思いながらもジェット機は進み、着々と目的地に近付いて行つていた。

行き先はイタリアです（後書き）

自分で書いておきながら『ボンゴレってどんだけ世界中に会社持つてんだよ…』って言つてました。

いや～、ほんとこどんだけ～（古い。←）

一応イタリアの治安はボンゴレが守つてるので、イタリア政府は結構ボンゴレの事は信用しています。ひとつひとつ見てください

笑

ちなみに説明の時の口調が山本っぽくないのは、部下に説明する時の口調に慣れてしまつたからです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0151ba/>

並中同窓会来る！

2012年1月8日18時48分発行